平安時代の漢語語彙について

浅野敏彦

一

平安時代にごく普通に用いられていたと思われる漢語の様相を、意味分野に分類することによって、漢語語彙としてとらえ、考察を加えてみようと思う。

考察の対象にした漢語は、源氏物語と大鏡とに共通してみえる漢語三九一語である。源氏物語と大鏡とを対象にしたのは次のような理由による。

前述のように、本稿では、平安時代にごく普通に用いられたと思われる漢語を問題にしようとしている。ごく普通にということは、次のような意味である。すなわち、貴族の男性、女性のいずれもが、日常生活の会話や読み書きの時に用いるということである。それ故、対象とする文献もごく普通のものがいるのである。資料とした源氏物語、大鏡は、ごく普通の文献といえるかと思う。源氏物語は、孝標女に象徴されるように、当時の人々によく読まれた作品であり、その言語は特殊なものではなかったであろうし、そこにみえる漢語も〈所謂「表現語彙」であったと見ることが出来る〉[1]のである。

また、二作品とも、日記のように、個人の生活と結びついた限られた世界のみを描いているのではないところから、語彙も豊富であり、より普遍的であろうと思われる。さらに、漢語(混種語を含む)のことなり語数にしても、源氏物語一四七〇語、大鏡一五六〇語(『古典対照語い表』の語種別統計表による)と近似しており、一方が一方に包まれてしまうということなく、共通語を抜き出すことが可能である。

なお、源氏物語と大鏡とに共通する漢語が、上述したような貴族階級の人々が日常生活の中でごく普通に用いた漢語と考えてよいかという疑問もあるかと思われるが、二作品に共通している漢語の約六〇%が枕草子とも共通することや、多くの語が他の仮名文や色葉

字類抄にも見いだせることなどを考えれば、二作品に共通している漢語を通常の漢語としてとらえてゆくことは、的をはずしてはいないと考えるのである。

語の収集は、『源氏物語大成』索引編、『校本大鏡総索引』を資料としている『古典対照語い表』によって行なった。なお、見落し等を防ぐために、柏谷嘉弘氏「大鏡の漢語」（山口大学教育学部研究論叢　一七巻第一部）の語彙表を合わせて利用した。[2]『古典対照語い表』を利用したのは、索引間の単語の認定の違いが統一されているという理由による。『古典対照語い表』を利用したことにより、二字の漢語からなるサ変動詞は、漢語＋すの二語と考えた。また、混種語も対象とし、尼、瓦の梵語も漢語として取り扱った。

以上のようにして得た漢語三九一語を、『分類語彙表』の意味分類に基づいて分類した。大分類のみであるので、現代語の分類表ではあるが、平安時代に適用しても問題はないと考えた。結果を表Ⅰの語彙表、表Ⅱの統計表で示した。

二

表Ⅱをみると、体の類に属する語が全体の八〇％以上を占めている。全体が三九一という大きくない数値のため、八〇％という数値は、語の出入りによって動くもので慎重でなければならない。浅見徹氏が、『分類語彙表』に従って、後撰集、土左日記、竹取物語の全語彙を意味分類された研究[3]によると、三作品の体の類が占める割合は、五〇％前後である。この数値と比べると、漢語語彙の体の類に占める八〇％という数値は、非常に大きいといえる。

体の類の中では、「2人間活動の主体」に属する語が、体の類の三〇％以上を占めていて最も多いのであるが、これは、その中に官位官職を表わす語を多く含んでいる（四〇語）ことにその原因があると思われる。参考までに示すと、伊勢物語では、体の類の2に属する漢語一九語の中の一一語まで、平仲物語では、九語の中四語までが官位・官職を表わす語である。

逆に、「5自然物および自然現象」に属する語がきわめて少ない。その中では、植物の名称が五〇％を占めている。伊勢物語では、この分野に属する漢語は白菊一語のみであり、平仲物語では無い。

右に述べた如く、ことなり語数において、多くを占めるのが2で、少ないのは5であったのだが、この2、5の分野は使用度数からみても、他の三つの分野と異なった様相を示しているのである。すなわち、2は使用度数五〇（源氏物語と大鏡との使用度数の合計。以下同じ）以上の語の占める割合いが他の四分野に比べて非常に大きく、5は五〇以上の語は無いのである（表Ⅲ）。そして、使用度数一〇以下の語の占める割合は、2が三九・一％と少なく、5は七〇

%と多くなっている。以上のことは、2に属する漢語には、使用度数の高い、人々が普通に用いるなじみの語が多く、5にはそういう漢語が少ないということになる。

また、「4生産物および用具物品」に属する語も多くみえてはいるが、これらの語は、中国からの文物の移入といったことと深い関係があろうかと思われる。そして、これらの語の指す事物が、当時の貴族階級の人々にとって身近なものであっただけに、これらの漢語が、ごく一般的な語であったであろうことは容易に想像できるのである。

たとえば、室内に垂れ下げて隔てとする布のことを漢語では帳というが、これを和語ではトバリと言ったらしい（和名抄）。そして、『対照語彙表』によって調べると、平安時代の十一の文学作品には、トバリはわずか四例であり、帳は五六例みえている。また、廊は、和語ではホソドノと言ったらしいが（和名抄）、十一の文学作品には、一五例しかみえず、廊は、四七例みえているのである。

次に、体の類の中で、各々の項目に属する漢語の割合を浅見氏の前掲論文（注③）表D.1の数値と比較すると差異のあることに気づく。すなわち、漢語をも含めた全語彙では、1と5の項目に高い山ができるのであるが、源氏物語、大鏡の二作品から得られた共通漢語では、2がもっとも高く、5が極端に低くなっているのである。もっとも、単語の認定の違いなどによって数値は動くであろうけれど、表Ⅳによるといずれも、共通漢語のような構造を示してはいない。

2に漢語が多く、5に漢語が少ないと結論づけるについては、各項目の漢語が各々の項目の全語に対してどの程度の割合を示しているかについてみておく必要があると思われる。しかし、今回は、手もとにある伊勢物語と平仲物語との資料を示すことで類推し、源氏物語と大鏡との調査は他日を期したいと思う。表Ⅴは、2に漢語が多く、5に少ないということと矛盾する結果ではない。

次に、体の類に属している漢語全体を見わたすと、

数詞、助数詞（位、人、月、尺……）、仏教、皇族、官位官職、政治（除目、宣旨……）、内裏（弘徽殿、淑景舎……）、調度（几帳、脇息、屏風……）

に関する漢語が多い。中でも、仏教に関する語は、すべてで、全体三九一語の一〇%強にあたる四一語を数えることができる。仏教に関する語が多いのは、外来思想である仏教が入ってくるとともに、その思想のみでなく、それを表現する言語までも借り入れたからに他ならない。

二作品の共通漢語として得られた中に、このように仏教に関する語が多くみられることは、平安時代の貴族階級の人々にとって、仏教に関する漢語は、十分理解もでき、会話に用いたり、文章に書い

表Ⅰ　語彙表

	体の類	用の類	相の類
1 抽象的関係	一 二 三 四 五 六 八 〇 二 三 四 五 六 一九 二〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三・三 四・五 七・八 三・三 三七・八 三人 五人 六人 〇人 三人 三三人 五・六人 七・八人 三年 六年 十余年 二・三年 三日 四日 五日 七日 三五日 六日 三位 五位 六位 八月 一尺 一品 二品 一部 第一 大小 上 左右 方 後夜 相 気 気色 容体 突験 例 真実 調子 拍子 大事 本性 忌日 様 次第 臨時	なし	非常 無下 別 少々 頓に 便なし 故 さ様 いか様 か様 かう様 こと様
2 人間活動の主体	僧 僧都 僧正 師 法師 老法師 入道 座主 新発意 阿闍梨 講師 験者 尼 弟子 俗 弥勒 本尊 極楽 宿世　先帝 院 国王 帝王 春宮 前坊 斉院 斉宮 中宮 女御　公卿 殿上人 地下　女官 女房 内侍 陪従 受領 前司 家司 摂政 太政大臣 右大臣 左大臣 内大臣 右大将 左大将 大将 中将 少将 大納言 中納言 権中納言 右大弁 左大弁 右中弁 弁 右兵衛 左兵衛 兵衛 右衛門 左衛門 衛門 大蔵郷 宮内郷 式部郷 兵部郷 民部郷 式部 大臣 大夫 大弐 兵衛 右近 左近 権 丞 頭 監　待従 宰相 帥 按察使　八省 諸大夫 勅使 雑役 御封　下臈 下衆 随身 従者 博士 有職 学生 木工 相人　太郎 二郎 三郎 七郎 世間 世界 天下　族 先祖 主 衆 上手 尊者 天狗 悪霊		
3 精神および行為 人間活動—	念仏 法 修法 法文 法事 経 誦経 読経 出家 結縁 功徳 徳 供養 菩提 布施 庚申 念誦 除目 節会 大饗 御禊 行幸 宣旨　陪膳 元服 七夜 童殿上 詩 和歌 学問 文字 絵 蒔絵 下絵 楽 試楽 句 願文 日記 遺言 題 消息　宴 賀 会　銭 領 禄　才 無才 才学 愛敬 懸想 本意 追従 懈怠 勘当 案内 化粧 対面 用意 修理 逍遥 栄華 恩賜 面目 道心 道理 作法 葬送 乱声 三昧　戒 任 案 益 労 興	装束く 愛敬づく 気色だつ 御覧ず 御覧じつく 御覧じ入る 御覧じ置く 御賢じ分く 御覧じおこす 臆す 感ず 啓す 興ず 困ず 制す 奏す 調ず 拝す 辞す 孝ず 信ず 動ず 領ず 請ず 具す うち具す ひき具す とり具す 念ず 念入る 誦す うち誦す	古代 今様 不便 不定 非道 顕証 揭焉 無礼 無徳 無心 希有 優 不意に 切 労たし 労労じ 怠怠し 辞がはし
4 用具物品 生産物および	三宝 法服 袈裟 数珠 浄衣 弘徽殿 淑景舎 登花殿 後涼殿 大極殿 殿上 陣　対 寝殿 中門 馬道 廊 台盤所 曹司 御房　楽屋 舞台　大学　堂 中堂 三昧堂 七大寺　瓦 格子 几帳 帳 台 盤 座 調度 脇息 屏風 螺鈿　カハラケ(土器)　装束 御衣 烏帽子 香 香染め 色紙 箏 双六 本 集 海部 料 券		
5 自然現象 自然および	節 天変 菊 紅梅 竜胆 沈 紫檀 柑子 生 鬢茎	なし	なし

表Ⅱ

類	項	ことなり語数		のべ語数	
		実数	百分率	実数	百分率
体の類	1	76	23.1 %	3,065	29.9 %
	2	110	33.5	4,423	43.2
	3	80	24.4	1,621	15.8
	4	52	15.9	1,043	10.2
	5	10	3.1	93	0.9
	小計	328	83.9	10,245	85.1
用の類	1	0	0	0	0
	3	32	100	776	100
	5	0	0	0	0
	小計	32	8.2	776	6.4
相の類	1	12	38.7	683	33.2
	3	19	61.3	339	66.8
	5	0	0	0	0
	小計	31	7.9	1,022	8.5
合計		391	100	12,043	100

（注） 百分率は，項については小計の数値，類については合計の数値が分母にくる。

表Ⅲ　使用度数50以上の語

項＼類	体	用	相
1 ⑨	二(54) 気色(763) 例(567) 様(1006) ④	⓪	無下(56) 便なし(61) 頓に(65) さ様(155) か様(233) ⑤
2 ㉗	僧都(78) 法師(51) 入道(146) 阿闍梨(54) 尼(58) 宿世(120) 院(446) 春宮(182) 中宮(106) 女御(191) 殿上人(66) 女房(130) 太政大臣(63) 太将(277) 中将(265) 少将(114) 大納言(73) 中納言(140) 弁(69) 式部郷(59) 兵部郷(68) 大臣(83) 大夫(47) 頭(68) 侍従(78) 宰相(90) 帥(52) ㉗		
3 ⑫	絵(71) 消息(155) 才(54) 本意(114) 対面(147) 用意(90) ⑥	御覧ず(235) 奏す(72) 念ず(56) ③	切(52) 興(58) 労たし(93) ③
4 ⑤	対(141) 寝殿(53) 格子(54) 几帳(117) 装束(96) ⑤		
5 ⓪	⓪	⓪	⓪
計 ㊸	㊷	③	⑧

（注） 表中の(　)内の数字は使用度数，○内はことなり語数の数字である。

表Ⅳ　体の類の語彙構造

項＼作品	源氏物語	蜻蛉日記	枕草子	伊勢物語	平仲物語
	%	%	%	%	%
1	21.9	27.1	20.6	24.4	28.3
2	20.1	14.9	18.5	25.2	22.1
3	24.2	18.0	17.8	14.6	15.7
4	15.9	16.8	21.6	14.5	10.0
5	17.9	23.2	21.5	21.2	23.8

（注）源氏物語，蜻蛉日記は，伊牟田経久氏「源氏物語名詞語彙の構造」（『佐伯梅友博士古稀記念論文集』所収），枕草子は，同氏「枕草子名詞語彙の構造」（言語と文芸70号）による。伊勢物語，平仲物語は『伊勢物語総索引』（明治書院），『平仲物語総索引』（初音書房）によって筆者が調査したものである。

表Ⅴ　体の類各項目の全語彙に対する漢語の占める割合

項＼作品 数値	伊勢物語			平仲物語		
	A 全語数	B 漢語	B/A×100（%）	A 全語数	B 漢語	B/A×100（%）
1	197	8	4.1	133	3	2.3
2	203	19	9.4	104	9	8.7
3	118	15	12.7	74	5	6.8
4	117	8	6.8	47	2	4.3
5	171	1	0.6	112	0	0
計	806	51	6.3	470	19	4.0

たりすることもできる語であったと考えられよう。とするなら、源氏物語には無い「往生」「地獄」、大鏡にみえない「回向」という仏教に関する漢語も、表Ⅰにみえる漢語と同様の性格を有していたといえようかと思う。

仏教に関する語と前述の官位・官職に関する語とが目立つのであるが、使用度数の点からもこのことは言えて、使用度数五〇以上の漢語四二語の六〇%以上にあたる二七語が、仏教と官位官職に関する語なのである。

三

用の類に属する漢語動詞は、『古典対照語い表』によると、他の多くの作品においても用いられ、使用度数も多く、平安時代にごく普通に用いられた漢語であったことを推測させる。いま、『古典対照語い表』に示されている平安時代の文学作品十一作品中、八作品に共通してみえる「具す」と、五作品に共通してみえる「制す」の目的語にどのような語ができているかについて、源氏物語を例

にしてみてみれば次の如くである。

「具す」の目的語には、〈殿上人あまた具して、まゐりたるに、はしたなくなりぬ〉（総角）のように、殿上人の他、若宮、東男、人、袴、一壺、御衣、御装（よそほひ）という和語や、大夫、随身、御調度、家司という漢語がきている。また、「制す」の目的語には、〈いさゝかもの言ふをも制す。なめげなりとてもとがむ〉（乙女）、〈かの宮の、御忍びありき制せられ給ひて〉（総角）の如く、もの言ふ、御ありきがきている。和語が目的語にきていることは、「具す」や「制す」が和語と結びついても異和感を感じさせない漢語であったからではなかったろうか。目的語になっている漢語も、すべて、三九一語の中にみえる漢語である。このような点から考えて、具す、制すは十分日本語化していたものといえるだろう。

そして、これらの語と違った層の漢語として、たとえば、源氏物語の帚木にみえる、漢語を用いる賢女の会話の中に出てくる「服す」を指摘することができる。

月頃、風病重きにたへかねて、極熱の草薬を服して、いとくさきによりなむ、え対面給はらぬ。

喪に服する意味での「服す」は、枕草子、蜻蛉日記にみえるが、飲む意味での「服す」は他にみえないようである。こうした用例の少なさということの他に、目的語となっていることばが、「具す」や「制す」のそれとは違っているのである。極熱、草薬という二つの漢語は、『古典対照語い表』では、源氏物語の例しかみえない語で、硬い漢語であったと思われるのである。

相の類は、用の類と同様、体の類の一〇％程度しかないのであるが、使用度数四以上の語ばかりであるところに特徴がある。

源氏物語にのみ限ってみると、源氏物語の形容詞、形容動詞は一一九〇語（『古典対照語い表』所載の統計表）であるが、その中、漢語を構成要素とする形容詞、形容動詞は、その三・四％の四一語であり、その三〇％に当る一三語までが、使用度数一の語なのである。この三・四％という数値は、現代語の例をもってくるまでもなく、ごく小さい数値である。漢語がこうした相の類まで入りこむことは、平安時代にはほとんどなかったようである。そうした中で、無下、便なし、頓に、切、労たしといった語は注目してよいと思う。すなわち、いずれも使用度数が五〇以上であり、頓、切は日本語化したよみになっていて、これらの語が普通の漢語になっていたであろうことを十分推察させるのである。

体、用、相の類を含めて、「2人間活動の主体」、「3人間活動――精神および行為」の意味分野に属する漢語がもっとも多く、この二つの意味分野のみで全体の六〇％を占めることになる。これは、全語彙を調査された浅見氏の研究（注③）では、全体の三〇％しかこ

の二つの分野では占めていないことと比べてみると、漢語は、人間そのものに関係する語が多く、生産物や自然のように、人間を外からとりまいているものに関係する語が少ないといえるようである。

また、「1抽象的関係」に属する漢語は、異なり語数では、「3人間活動」より少ないのであるが、使用度数では逆転している。これは、様[5]気色、例という各々、一〇〇六、七六三、五六七という使用度数の非常に多い語が含まれていることによる。

次に、用、相の類に属する漢語について少し触れておきたい。

〈年ごろ、かう思しおきてしかど、え辞し給はざりしを〉（源氏物語　竹河）の「辞す」は、〈さる例もありければ、すまひはて給はで、太政大臣になり給ふ〉（大鏡）の「すまふ」に、〈法華経をいみじうたうとく誦じたまふ〉（大鏡）の「誦ず」は、〈仏の御しんどもなど、誦みたてまつりたる〉（枕草子）の「誦む」に対応している。和語で表現できていた意味領域に漢語が入ってくることは、人々が、漢語の持っている表現力に依拠して言語表現を行なおうとしていたことに他ならない。同様のことは、相の類の漢語についても言えるかと思う。

用、相の類に属する漢語が全体の二〇％にも満たないという点には、資料が仮名文であるということも原因してはいる。しかし、仮名文以外の資料にみえる漢語は、多く文章語であって、日常、女性の口にまでのぼるような漢語ではなかったと思われる。

例えば、希有は、男性の手になる漢字文や辞書に数多くみえ、貴族の男性にとっては、ごく普通の漢語であったと思われる。しかし、この語は、当時の仮名文に普通にみえる語ではなく、希有は、和語メヅラシを凌いではいなかった。[6]また、現代語ではごく普通に用いる不思議という漢語は、この時代では、仏教的な色合いの濃い語で、大鏡を除いては他の仮名文にはみえない。[7]相の類に属する漢語が、対応する和語を凌いで、ごく普通に口頭語として用いられるには、時代が下がらなければならないようである。[8]

以上、漢語を意味分類して、その特徴について考察を加えてきたのであるが、用、相の類に属する語については、一語一語について、その用いられ方にも触れる必要があったかと思う。また、源氏物語、大鏡の漢語総てについて意味分類すれば、どのようになるか、他の時代の漢語はどうか、といった問題も残っている。本稿は、平安時代の貴族が、日常の会話や文章の中で、ごく普通に用いたであろうと思われる漢語について概観した。

注

① 築島裕『平安時代語新論』（東京大学出版会）一九六九年、五九〇頁。

② 柏谷氏は、共通漢語を四九八語とされていて、本稿の三九一語と異っているが、これは、二字漢語からなるサ変動詞の扱い方、御という

接頭辞がついた混種語の扱い方などの単語認定の違いによる。

③ 『講座国語史3　語彙史』（大修館書店）所収「古代の語彙Ⅱ」一一五頁所掲の表B。

④ 玉村文郎氏「現代形容語彙の構造」（同志社国文学　一一号）によれば、漢語形容動詞は、『分類語彙集』「相の類」の五一・五六%を占めている。

⑤ 漢語ではなく固有の日本語であったとする考えもあるが、通説に従った。

⑥ 拙稿「漢語『希有』について」（解釈　二一巻三号）

⑦ 拙稿「漢語の類義語――奇怪、奇特、希有、不思議――」（同志社国文学　一二号）

⑧ 拙稿「綺麗　うつくし　きよし――漢語と和語」（同志社国文学八号）